

2018年5月27日(日)／説教者:神谷武宏

説教:「朽ちないものを着る」

聖書:コリントの信徒への手紙一15:50～58

ここでは人の「死」について語られている。生きている者にとって死は、必ず訪れるもの。健康な体を持っていようが、お金、知恵を尽くしていても、生きている者は皆、「死」という問題にぶつかる。家族の死、知人友人の死は、悲しみをもたらし、自分の死は、恐れをもたらす。死というものは、いつの時代も最大の課題、“敵”とも思えるほどに我を惑わすものだったりする。ところが聖書には、主イエスの復活が記され、キリスト者なる私たちに最大の恵みが注がれているが……。どうだろうか、その復活の恵みが私たちには満ち溢れる恵みとしてあるか？

今朝の聖書は、死と向き合う事の中から、このような言葉が綴られている。《この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」》人間の体は「朽ちるもの」。しかし、聖書は、死は決してこれで“おしまい”というものではないと言っている。それは「朽ちないもの着る」ことにおいてと言うわけだが、この「朽ちないもの」とは何か？

私の神学部の同期が、妻と子に先立たれるという経験をした。「なぜ、..どうして、妻が、息子が、先に行ってしまったのか？」“死”に対する悲しみを背負う中で、悲しみは、中々癒えないものであるが、しかし聖書の中に「暗闇の中に光があった」とある言葉に慰めを受けたという。死の暗闇の中に光がる。また「光は暗闇の中で輝いている」という言葉もあるが、死が暗闇の中に永遠に葬られていくものではないということ。そしてその光とは、イエス・キリストご自身であること。そのことを信じる事がどれだけ慰めであるか。イエス・キリストを信じ、聖書を読むことが、どれだけ人生の支えであるか。死は単なる永遠の命への「通路」にすぎなくなるもの。すべて神の懐へ導かれるものであると……。

それは此の世と天の国が一体であること、繋がっていることを言っている。決して天の国は、遠く離れた彼方にあるものではないということ。「朽ちないものを着る」ことで、私たちが神の懐に帰ることが出来るその希望に与っていきたい。

イエス・キリストの死からの復活の出来事は、決してよそ事ではなく、「死」という見えない世界に、暗闇とも思える世界に、希望の光を灯してくださる私たちへのメッセージとして、「復活」の業はある。主の恵みに感謝！（神谷）